

教育研究業績

2024年 5月 1日

氏名 宍戸 裕子

研究分野	学位	
看護教育学	修士（看護学）埼玉医科大学大学院 看護学研究科	
研究のキーワード		
実地指導者、新卒看護師、自己成長、ナラティブ		
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例	2018年4月～2019年3月	埼玉医科大学保健医療学部看護学科（成人看護学領域）助手として 1. 成人看護学領域で担当した講義および実習 1)成人看護学方法論において、運動器疾患の看護の講義を30分担当 2)成人看護学実習（急性期看護、慢性期看護） 3)実践応用の看護学実習 2. 研究の指導 卒業研究（看護研究セミナー）学生3名の指導を講師と共に担当 3. フィジカルアセスメント演習 フィジコによる身体アセスメント演習（2コマ）
	2021年9月～2024年3月	埼玉医科大学保健医療学部看護学科（基礎看護学領域）実習補助教員として 1. 基礎看護学領域で担当した講義・演習および実習 1)基礎学領域において、演習レポートを添削 2)基礎看護学領域のグループ担当 3)基礎看護学実習Ⅰ 4)基礎看護学実習Ⅱ 5)実践応用の看護学実習 2. 老年看護学領域で担当した実習 1)老年看護学実習Ⅱ：2023年度 3週
	2024年4月～現在	西武文理大学看護学部看護学科（基礎看護学領域）助教として 1. 基礎看護学領域で担当した講義・演習 1)基礎看護学領域の講義補助、演習準備 2)基礎看護学領域の演習グループ担当 2. 臨地学習 1)看護とホスピタリティⅠの臨地学習を2日間担当
2 作成した教科書、教材		なし
3 教育上の能力に関する大学等の評価		なし
4 実務の経験を有する者についての特記事項		なし
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許	2001年4月 2014年1月	看護師免許取得 看護学生実習指導者講習会修了
2 特許等		なし
3 所属学会	2024年5月～現在	日本看護学教育学学会 日本看護管理学会 日本看護科学学会
4 実務の経験を有する者についての特記事項①	2002年度～2003年度 2005年度～2009年度 2016年度～2017年度 2011年度～2017年度 2013年度～2017年度 2012年度～2015年度 2020年度～2021年度	1. 病棟看護師として担当した実習 准看護学校（基礎実習、各論実習） 准看護学校（基礎実習、各論実習） 准看護学校（基礎実習、各論実習） 2年過程 看護専門学校（基礎実習、各論実習） 2年過程 看護専門学校（統合実習） 保険医療学部 看護学科（実践応用の看護学実習） 准看護学校（基礎実習） 2年過程 看護専門学校（各論実習）

5 実務の経験を有する者についての特記事項②	2003年度, 2008年～ 2017年度 2010年度～2015年度 2016年度～2017年度	1) プリセプター業務 (新卒看護師への技術面・精神面のフォロー) 1) 退院時家族指導 (家族指導、経管栄養マニュアルの作成) 1) ストーマ担当 (患者指導、家族指導、指導用パンフレット作成)		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				なし
(学術論文)				なし
(その他) 国内発表 1 薬剤・排便に頼らない 安楽な排泄への試み ～温罨法・腹部マッサージの援助を通して～ 2 薬剤・排便に頼らない 安楽な排泄への試み ～温罨法・腹部マッサージの援助を通して～ 3 はじめて新卒看護師指導を経験する実地指導者の1年間の自己成長 - ナラティブ分析を通して- (修士論文)	共著 共著 共著	2006年2月 2006年2月 2024年2月	社団法人埼玉県看護協会第4支部 第22回看護研究発表会, P6 - 10. 埼玉県療養病床協会 看護・介護部会 第12回 看護・介護研究発表会集録) 現: 一般社団法人 埼玉県慢性期医療協会	(口述発表) ○宍戸裕子、高野泰子 脳血管後遺症によりADLの低下・長期臥床をきたし、薬剤を使用して排便コントロールを行っている経管栄養患者に、温罨法とマッサージの介入しない期間3週間と温罨法・マッサージの介入する期間3週間の観察を行った。結果、介入後は腸蠕動音が増加し、臨時下剤・グリセリン浣腸の使用頻度は減少し排泄を助ける力にはなったが、対象者が少なかったことや援助時間の配慮が十分でなかった。経管栄養注入後3時間(午前)の方が経管栄養注入後2時間(午後)よりも、腸蠕動音が良好であった。 (口述発表) ○高野泰子、宍戸裕子 同上 宍戸 裕子、粟生田友子 1年間の新卒看護師指導は、5つの自己成長の過程としてまとめられた。人を育てることは、自己成長につながり、新卒看護師指導を経験する実地指導者に対して、その状況をどのようにサポートしていくかが鍵となると考えられた。